

「第4回おごおり俳句&ウォーキング」を行いました！

秋も深まりゆく10月12日、俳人種田山頭火ゆかりの地・小郡をウォーキングしながら、俳句を楽しむ「第4回おごおり俳句&ウォーキング」を開催しました。



テーマは「**小郡再発見**」です。

幕末の頃の絵地図を手に、当館文化財専門員の説明を聞きながら
中領八幡宮⇒柳井田関門跡⇒四十八瀬川の風景⇒新町の町並み⇒海
善寺（遠藤柳斎頌徳碑・玉木彦助墓・山頭火句碑）⇒中郷八幡宮を
歩いて廻りました。



道端の秋の草花を手に取り、名前を言い合ったり、
匂いをかいだり、八幡宮の境内から遠くにSLの
汽笛を聞いたり、小郡の街を眺めたり……………。
見るもの・聞くもの・触れるものがとても新鮮で、
まさに小郡を再発見することができました。





お昼前に「小郡高齢者生きがいセンター山手が丘」に戻り、
昼食もそこそこに作句です。吟行は、初めてという方も多かった
のですが、とても積極的に投句されました。



そしていよいよ、句会。小郡俳句同好会会員の
方々のご指導をいただきながら、笑い声も飛び出す
とても和やかな会となりました。
当日は、21名の参加があり、心も身体も頭も心
地よい汗をたっぷりとかくことができました。



秋めいて真鯉はしやぐや四十八瀬川	しょうくん	猫のゐる弘中さんちの金木犀	賀代子
かたばみのあしたのあめにぬれてをり	雨彦	参道の柿を狙うややんちやガラス	しょうくん
竜田姫来るしづけさに志士の墓	紀子	古に大樹抱いて秋惜しむ	喜久恵
桜もみじ誰か鈴振る八幡宮	典子	小郡に蒸気の汽笛秋日和	雨彦
木犀をたどりたどりて宮参り	陽子	窓枠にしのお往事や秋気澄む	縁
鐘の音の子規も聞きしや柿たわわ	保江	枇杷大樹幕末の志士墓ならぶ	雨彦
六地藏古刹を守りて野菊咲く	妙子	男縦女縦ゆるるゝ繩秋の風	典子
石文の画家の一生小鳥くる	縁	あいらしく名を裏切りて臭木の実	路子
秋水や曲がつてみたき路地ばかり	紀子	秋の日をこぼさじと抱く樟大樹	てん子
思い出をたどりつ歩く花野かな	和子	手のとどくところ渋柿かもしれず	雨彦
水澄みて四十八瀬に鮓の群れ	妙子	水澄むや句作に励む友と居て	淑子
流れゆく四十八瀬の落葉船	愛	野菊晴れ落ち着きはらつた石地藏	保江
のど飴を含みて秋の時雨なか	路子	ウオーキング金木犀の香りたつ	喜久恵
沖に向く親子地藏に実むらさき	妙子	秋優しせいたかあわだち小さく咲く	尚子
狛犬は官居一途に石蔭の花	妙子	わらべ地藏につこり迎えて柿の秋	喜久恵
落葉のあれよあれよと進む官	保江	櫛紅葉根元に立ちし芭蕉句碑	てん子
筋曲げず石を貫く野菊かな	しょうくん	緋が映えて小ぶりなれども柿の艶	愛
官落葉流転の鐘を撞きにけり	良子	埋めもどす官の貝塚草紅葉	縁
秋しぐれ自販機ボタンお茶押して	路子	稲穂背に赤い帽子の地藏尊	淑子
菊日和道草たのし出会いあり	和子	新町の煉瓦の塀に秋の薔薇	博江
臭木の実隊士かけ抜け大鳥居	淑子	俳句ウオークに浅黄斑も来てをりぬ	良子
四十八瀬川小さな花野は刈り取られ	良子	亡き人の笑み給うなり秋桜	尚子
苔石の下にも朽ちざる維新の志	しょうくん	薄紅葉貝塚跡に佇むのみ	伝子
貝塚は静まりて居り四十雀	陽子	国道の車線分け立つ芒かな	富清
ウオーキング坂道匂ふ木犀香	妙子	しぐるるや若き隊士の墓もあり	和子

皆と行く道ほがらかに紫苑咲く 陽子

それとなくつむじ見下ろすアワダチソウしょうくん

秋日和S.L列車のマンホール 博江

雨雲がひやりとせまり実紫 陽子

木犀の歴史ある町巡りけり 博江

秋風に百面相の地蔵かな 愛

ふくよかに目を閉づ地蔵露の寒 賀代子

雨粒の落ちてゆるぎし秋の草 てん子

野の花を詠ふウオーク体育の日 良子

水流る秋のトンネルすすきの穂 愛

街ながむ貝塚跡に薄紅葉 淑子

身に入むや昔と同じ汽笛過ぐ 典子

旧き道おしろい花の実を三つ 陽子

秋寂ぶや注連渡しある夫婦樅 紀子

山口は文人多し野紺菊 博江

ほととぎす神社の多き小郡町 博江

小鳥くる小郡新町四丁目 賀代子

貝塚の深き睡りへ木の実降る 紀子

わらべ地蔵六つ六様小鳥くる 典子

沈丁花小郡新町雨あがる 雨彦

顔寄せて何を語るや山の柿 富清

手水に心身清めるのこづち 淑子

金木犀町を包みて安らけし 尚子

古い旧家林勇蔵いるか 健一

明治維新ゆかりの墓や桜紅葉 良子



内緒ごと聞かれてしまふ秋のぼら 縁

静かなる灯籠の下に石路の花 喜久恵

すすき野や汽笛ひびかせ通過駅 和子

秋惜しむ判読したる篆書体

賀代子

わき道も時々拾いもの

健一

磴半ば奥の威厳や秋の宮

保江

秋の雲四十八瀬の水にあり

尚子

藤の実のぱんとはじけし貝の塚

てん子

畑も負けて草まみれ

健一

秋の空古思う樹林かな

喜久恵

往年の石州街道秋時雨

典子

香り立つ金木犀の遊歩道

愛

こだわりを捨てたし虫の音も絶えし

尚子

S L やさくら紅葉を揺らし来る

富清

たわたわと柿とS L 中郷

縁

家族と家族が出会ってあいさつ

健一

寂しさに浸れる余裕秋ともし

尚子

ああ今日は国旗揚がるや体育の日

富清

椎の実や宮の境内かくれんぼ

和子

柳斎碑の読めぬ漢字や秋の草

保江

かたばみの咲き満ち常夜灯の堂々

伝子

日当たりて屋根より高き金木犀

伝子

維新経し古刹のうらの秋の声

路子

石段の奥から顔が蓼の花

富清

禅寺のわらべ地藏や秋うらら

伝子

秋風や届かぬ思い海善寺

尚子

巴紋の神様どなたでしょう

健一

連衆のちぎりて匂ふ臭木の実

縁

そぞろ寒志士の運否を分けし跡

路子

色鳥や鐘楼のあればつきたがる

伝子

赤まんま風に揺れてる志士の墓

尚子

先頭のマイクさやかに旧街道

紀子

ここからは石州街道秋時雨

てん子

行く秋の志士を弔ふ雨の降る

賀代子

